

# 平成二〇年度企画展「花の宴・堀切の夢」の展示構成について

葛飾区郷土と天文の博物館 学芸員 橋本直子（博士 環境学）

## はじめに―開催の経緯―

現在日本には約四千館の博物館施設があります。当館は、一九八〇年代以降、各地方自治体が相次いで博物館を設立した終焉期にあたる一九九三年七月に開館しました。地域博物館の基本的な機能は、「調査・研究」、「教育・普及」、その成果としての「展示」の三本柱



2階展示室入口

です。当館の設立の目的は、東京低地という地理的条件下に展開された歴史と文化の検証を郷土展示で、また最新の宇宙情報をプラネタリウムと天文展示で提供することとで、18年間にわたる活動を行ってきました。

当館の学芸員構成は、歴史・考古・民俗・天文分野が各1名で、各自専門に依拠しながらも、地域博物館が扱う多種多様な分野の展示も担当します。展示計画は、開館前からの予定で数年先まで決定しており、歴史担当の私に与えられた初めての特別展が平成6年度特別展「堀切菖蒲園―葛西花暦―」でした。この背景には、葛飾の区花でありながら、江戸時代後期から続く著名な花菖蒲園の歴史の解明が、検証されていないこと、その変遷が不明なことが挙げられ、開館後初の歴史担当による展示と

なったのです。

私は、まず花菖蒲とはどんな花なのか、展示としてどのような構成が考えられるのか、この方針を決めることからかかりました。私の専門分野は、文献史学（近世村落史）と歴史地理学であり「花菖蒲」とは全く異なる世界をベースとしてきました。そこで、私が道しるべとしたのは、相関芳郎著『堀切菖蒲園』（東京都公園文庫23、一九八一）でした。相關さんにお目にかかり、調査の進行に伴い、東京都の公園関係の方から当時日本花菖蒲協会事務局を担当していた三池延和氏の知遇を得ることができました。この二つの大きな出会いが展示を推進する力となりました。

一九九五（平成7）年、会期を3月20日から5月5日とした平成6年度特別展は、堀切菖蒲園を

歴史的に解明し、日本で初めての遊覧式の観光花菖蒲園という定義を確立した展示です。旧菖蒲園各家の資料の一部はすでに葛飾区の指定文化財となっていました。この展示で公開した旧菖蒲園各家に関する多くの文化財が、翌年度新たに文化財として追加登録されました。

特別展以降も、当館では菖蒲園と花菖蒲に関する資料調査と収集を継続してきました。これには、特別展を契機に日本花菖蒲協会との連携ができたことが大きく寄与しています。

加茂花菖蒲園の永田敏弘さんとの協業の成果は、葛飾区古文書史料集11『堀切と花菖蒲』・ブックレット8『花菖蒲―江戸の面影・堀切菖蒲園』（一九九八）、ブックレット13『花菖蒲 II・HORIKIRI JAPAN』（二〇〇二）、同14『花菖蒲 III・伝統の堀切菖蒲園』（二〇〇四）の刊行に結びつきました。また特別展の二年後の一九九七（平成7）年から二〇〇四年（平成14）年まで、6月の花菖蒲の開花の時

期に合わせて、館で收藏している堀切や花菖蒲に関する浮世絵、花菖蒲図譜などを館収蔵品展「花菖蒲」として7回開催しました。

### 博物館展示と植物

当館のように地域史を解明するために設立された歴史系の博物館では、多くのテーマに基づいた展示を定期的に開催しています。しかし、そのなかで、「植物」を扱う展示は多いとはいえません。平野恵（「植物を展示しない植物の展示」『園芸世界』8、二〇〇八）は、植物をテーマとした展示を以下の五つに分類し、整理しています。

- ①園芸の担い手としての植木屋に注目した展示
  - ②古典園芸の植物のうち1種類を取り上げたもの
  - ③行楽地をとりあげた展示
  - ④野菜の展示
  - ⑤本草・植物学の展示
- ①の嚆矢は豊島区立郷土資料館です。天正18年（一五九〇）徳川家康の入府によって建設された江戸は、台地部を中心に武家地が八

割を占め、残りが町民地でした。その後、江戸の拡大によって隅田川以東の低地帯である本所・深川地域にも武家地は広がっていきま

す。広大な庭園には植栽が必要であり、その供給源となったのは周辺の農村部でした。台地部の植木、低地部の花卉（草花）が江戸に供給されることとなります。豊島区は染井・巣鴨・駒込を擁した植木屋の故地であり、一九九三年「植木屋のある風景―（園芸都市）の地域性をさぐる―」が開催されました。②は当館の一九九五年「堀切菖蒲園―葛西花暦―」や、一九九九年国立歴史民俗博物館における「伝統の朝顔」です。

③の主役は桜です。北区飛鳥山博物館は、一九九八年「さく―

桜の美学と実学」以降、テーマを変え桜の展示を継続しています。平野は、当館と北区の展示を

次のように指摘しています。「資料が飛躍的に増加しない限りは、限られた数の資料で展示し、かつ桜で延々と展示しなければならぬのであるならば、資料を変えるか、

テーマを大胆に変えるかしかないという方法しか残されていない。葛飾は前者で、北区は後者を選んだのである」と。

④は、明治政府が野菜の改良・輸入に力を注いだ結果、花卉園芸にとつてかわったもので、地場産業としての野菜を扱っています。

⑤は、本草資料を所蔵する機関が限られているため、地域博物館ではなかなか展示しにくいことをあげています。

こうした観点からみると、二〇〇七（平成19）年、会期を3月24日から6月17日で開催された国立科学博物館の特別展『花』は、博物館における実物展示という点で画期的な試みでした。国立科学博物館が、歴史系ではなく自然科学系博物館であったために実現が可能であった展示だったともいえます。

そして、この展示で尽力された、鳥取の山脇信正さんと葛飾区郷土と天文の博物館との出会いは、間近に迫っていました。



葛飾区登録文化財  
尾張藩主徳川斉荘画讃  
坤花 日本一菖蒲

## 「花の宴・堀切の夢」の展示構成

堀切菖蒲園を再び展示のテーマとしたのは、13年前の展示以降、継続してきた資料調査で多くの新出資料が蓄積されたことが最大の要因です。また、地元堀切では旧小高・堀切園で当主の代替わりがありました。地域文化の継承のため、また過去に堀切菖蒲園の展示があつたことも知らない新しい入館者のためにも、再度資料を公開する必要を強く感じました。

展示は、どんな客層をターゲットにするかというの大きな選択事項です。その視点が曖昧だと、展示からのメッセージが希薄になります。私は堀切地区に焦点を絞りました。一方、浮世絵展示は、一般の来館者も楽しめる冬の花で構成しました。この両者のバランスで、堀切か浮世絵か、あるいは両者かという観覧者に選択の幅をもたせることが可能となりました。13年前の特別展は、展示準備に約3年間を要しました。今回は、展示資料がほぼ把握できていたことと、企画展のため図録作成がな

いということ、展示構想を固めたのは約1年前でした。前回展示からの踏襲は、浮世絵と菖蒲園関係の文化財ですが、今回は新たに古写真と絵葉書を加えました。継続してきた調査から、五つあつた代表的な園の景観にはそれぞれ特徴があり、建物の配置、植栽などで、単に「堀切」とあつても、どの園であるのかを特定できるようになつてきたためです。しかし、ここまででは、通常の歴史展示の範疇を超えるものでありませんでした。

二〇〇七年1月26日、当館で毎年開催されている日本花菖蒲協会の新年互例会・総会場で、山脇信正さんが、数年来研究され、年々開花を早めている促成栽培を、展示の主力にできないかというお願いをしました。真冬に花菖蒲を咲かせるという試みです。また五千種といわれ花期が1か月である花菖蒲を、インドアプラント（室内園芸植物）として開花時期を調整するという科学的な試みに強く惹かれるものがありました。山脇さ

んとお話しして、展示期間の後半、すなわち1月下旬であれば確実に開花が可能であることを確信しました。懸案は、鳥取の山脇家と当館の環境的な違いです。夜間は無人であり、休館日もあります。しかし、ここで判断を下さないと株の準備もあり、展示は不可能ということもわかりました。会長椎野昌宏さん以下役員の方々にご内諾をいただき、平成18年度企画展「花の宴・堀切の夢」は動き出しました。

### 促成栽培展示の実現

前例のない真冬における花菖蒲の実物展示に向けて、当館の課題は、山脇さんに花菖蒲を栽培していただくための「仕様書」の作成でした。

仕様書の項目は以下のようなつています。

1. 件名 葛飾区郷土と天文の博物館 企画展用超促成栽培花菖蒲栽培委託

2. 履行場所 葛飾区指定の場所

3. 履行期限 契約締結日の翌日から平成21年2月10日まで

4. 資料名 超促成栽培花菖蒲

5. 資料形状・点数 形状 6号鉢植え、170鉢

6. 委託内容

①栽培 企画展「花の宴・堀切の夢」の展示品として、通常6月に開花する花菖蒲の開花時期を1月20日に標準をあわせた促成栽培をする。

②栽培行程 (略)

③栽培品種 (略)

7. 搬送計画  
上記6③の20品種を3期に分けて搬送すること (以下略)。

8. 栽培指導  
展示期間中の花菖蒲鉢の管理、花摘み、鉢替えの方法・時期について、2回指導を行う。

9. その他 (略)

基本的には、一鉢を製品とみなし、開花までに必要な全ての要素である鉢・受け皿・赤玉土・肥料・殺虫剤・光熱費などの合計を鉢数で割ったものを一鉢の単価とする考え方です。しかし、二〇〇八年

の秋は石油価格が急騰し、夜間の暖房には痛手であったことと思います。山脇さんには仕様書以上のご苦労をおかけしました。

二〇〇七年9月17日板橋に小林昇さんをお訪ねし、展示室の造作についてアドバイスを受けた私は、10月1日、琴浦を目指し機上の人となりました。

### 展示、そしてその後

二〇〇八年1月19日午前10時半、日通のアロー便が鳥取から到着しました。荷台から青々とした元気な葉が見えたとき、1年以上に及ぶ山脇さんの花菖蒲との日々に深謝し、安堵の念が広がりました。待ち受けていた会長の椎野さん以下日本花菖蒲協会のみなさん、当区の文化財保護推委員の保田史義さんが、山脇さんの到着を待つて展示会場に花菖蒲を配置しました。保田史義さんは、堀切菖蒲園の再生事業や映像記録を長年手がけている方です。まったく栽培のノウハウを知らない私と富澤（当館専門調査員）にかわり、花菖蒲

が館内にある間、花摘みと水やり日に参らせてくださいました。第二便は1月30日、第二便は2月10日に順調に搬入されました。

当館での展示において、花菖蒲協会から指摘された当初からの懸念は湿度と採光でした。会場に充てた部屋は、西向きで開催中は閉館時もブラインドを開けておきましたが、建物の構造上直接の太陽光はなかなか入ってきません。冬季のため館内の乾燥もありました。そこで二台の加湿器を会場に入れ、開館時に運転を開始しました。残る課題は採光です。展示室内の照明は不十分なため、保田さんのアドバイスを受け、仮設壁に85ワットの当館の展示用スポットライトを3基、西側の梁に60ワットのレランプを3基取り付けたことで、開花は促進されました。2月に入ると、開く花も増え、独立して置いた水盤作りの見事さとともに、まさに花の宴にふさわしい雰囲気をかもし出しました。

展示は2月15日に終了しましたが、花菖蒲の部屋は25日まで延

長し、その後ロビーへ移動しました。最終的には、東京都立農産高等学校校園芸デザイン学科に一〇〇鉢が、残りを地元堀切の花菖蒲を育てる会や栽培経験をお持ちの方に引き続き経過を観察していただくということ、3月26日約二か月の間私たちを楽しませてくれた花菖蒲は、当館での役割を終えました。

学芸員として二度にわたる花菖蒲の展示から痛感したことは、「花菖蒲」という文化の継承には長い時間と手間がかかるということでした。江戸時代後期から昭和17年まで、堀切の地で隆盛を誇った花菖蒲は、いったん命脈を絶たれてしまします。唯一旧堀切園を母体とする葛飾区立の堀切菖蒲園が、高速度道路の高架下でありマンションの谷間であっても、多くの人が訪れ、マスコミに登場するのは、江戸花菖蒲の発祥の地であり、かつ日本で最初の花菖蒲園であるからにはかなりません。この伝統をもっと地域に浸透させるためには、地元で努力をされている方々はも

ちろんですが、より大局的な視点と方法論を持つことが必要です。そのためにも今後も日本花菖蒲協会のみなさんには、一層のご指導やご助言を賜りたいと思います。



ロビーでの花菖蒲



花菖蒲展示室外観（1階体験学習室）